

令和元年度 中学生の「税についての作文」

柏市長賞

目に見えない絆

柏市立逆井中学校 第二学年 上田 ひなた

年末に父の口から「ふるさと納税」という言葉を聞いた。これは、納税額の最大半分までを自分の住んでいる場所以外に納税するとお礼にその地の特産物を贈ってくれる、というものらしい。実際に北海道から届いた魚介類を私も食べさせてもらった。さすが北海道産というだけあって、とてもおいしかった。この時は、自分が住んでいる場所では手に入らないような物も他の地域との協力によってその特産物のよさを共に味わうこと、またその土地の長所も発見することもできた。

私はこの体験から、ふるさと納税は人と人との協力によってより良いものになっているのだと思った。また納税は義務としてだけの意味を持っているのではないのだと感じた。

人は人との協力関係の中で生活している。その一つ一つがなくてはならない大切なものである。その「大切なもの」が納税によって自然に作られていたのだ。

つまり納税という行為は、一見結びつきがなさそうに見える地域の人々との協力関係を生み出すことにつながっていたのだ。

税によって様々な人を助け、相手を笑顔にできる。その一方、相手からの助けも受け取り、自分も笑顔になれる。納税とは「やらなければならぬ行為」ではなく「自分も相手も幸せにすることができる行為」だと捉えるべきだ。

お互い、どんな顔で、どんな性格で、どんな人間なのか知らなくても、助け合おう、というあたたかい気持ちを感じ相手へ自然と感謝する。実際に言葉にしてその気持ちを伝え合うことはできなくても、そこには「目に見えない絆」が生まれるのだ。

これは、日本国内だけの話ではないと思う。世界には栄養不足の状態で飢餓に苦しみながら生活している人が約八億人もいるらしい。そのほとんどが南半球の発展途上国に集中しているが、北半球の先進国は自国の利益を最優先に考え、自分達の人としての欠陥を見落としているように私は思う。世界の人々が支払った税金を何にどのぐらい使用しているのか私には分からないけれど、間接的にでも、困っている人を助けるために税金を利用していただければ「目に見えない絆」が生まれ私はとても嬉しい。そして、全ての国の全ての人々が人助けのためにも税金を支払い、使った、という気持ちを持つことができた時こそ、その日を本当の意味で「世界が一つにつながる日」と呼ぶのだと私は思う。

目の前に見えなくても、はつきりと心で感じられるものはある。私は「納税」という行為を通して、まだ一度も会ったことがなく、これから先も会うことはないであろう人とも「目に見えない絆」を作り上げられるようになりたい。また、大人になった時、納税によって少しずつでも世間に貢献できるように努力をしたいと思う。